

第5回記念館講座 「川端龍子／青龍社とともに」

大田区立龍子記念館 学芸員 木村拓也

■川端龍子と青龍社の歩み

1885 (M18) 年 6月6日、和歌山市に生まれる (本名：昇太郎)

1908 (M41) 年 洋画家を目指しながら、『少女の友』などで挿絵を描いて生計を立てる

1913 (T2) 年 渡米、帰国後に日本画家に転向

1915 (T4) 年 30歳の時、再興第2回日本美術院展に入選。その後、院展の花形として活躍

1929 (S4) 年 院展脱退の翌年、自らの美術団体青龍社を設立

1963 (S38) 年 文化勲章受章と喜寿を記念し、龍子記念館を設立

1966 (S41) 年 4月10日 80歳で逝去。青龍社も龍子の死とともに解散する。



本日は、青龍社設立から龍子が亡くなるまでを、弟子とのエピソードとともに取り上げます。

青龍展に出品された龍子作品鑑賞のキーワード

○会場藝術

美術館での展示を前提とし、より大きく、鮮やかでわかりやすいテーマの作品を制作。

○大衆と芸術の接触

公共の空間で、美術の専門家ではなく、より多くの人々が芸術を楽しむことを目指した。

■青龍社を去った龍子の意志を継ぐ弟子

○最初期の弟子・福田 豊四郎 (1904 - 1970)

1904 年 (M37) 秋田県に生まれる (本名：豊城)

1921 年 (T10) 17歳で龍子に師事

1923 年 (T13) 京都に移り土田麦僊に師事

1929 年 (S4) 前年に東京に戻り、青龍展出品

1933 年 (S8) 帝展出品をめぐる、青龍社から除名

1948 年 (S23) 吉岡堅二らと「創造美術」設立

龍子は、弟子たちが青龍展のための作品制作に集中するよう青龍社の組織力を高めようとしていた。



豊四郎は、生活のため帝展へ出品し続けたいと申し出たが、龍子はそれを「潔し」としなかった。

・「創造美術」を設立し日本画の革新に取り組む

「世界性に立脚する日本画の創造を期す」という宣言とともに、吉岡堅二、上村松篁ら当時の日本画家十数人が集まり設立。その後、新制作協会日本画部と改名し、現在、社団法人創画会となる。

・豊四郎が龍子から学びとったこと

現在の新しい日本画に最初の原動力を与えたのは龍子。「技法上の問題よりも重要なのは、従来の日本画の考え方に対する反逆というか、表現精神の解放だった」と後に述べている。

○情熱の画家・横山 操 (1920 - 1973)

- 1920年 (T9) 新潟県に生まれる
- 1934年 (S9) 14歳で洋画家を目指し上京
- 1940年 (S15) 20歳の時、第12回青龍展に入選徴兵召集戦後、シベリアに抑留される
- 1950年 (S25) 30歳で復員。絵画制作を再開する
- 1962年 (S37) 作品の大きさに対する批判から青龍社脱退

シベリア抑留から復員後、青龍社の期待の新人として活躍する。



1962年、《十勝岳》について青龍社の古参からサイズを小さくするよう指摘を受け、青龍社脱退を決意

- ・20歳の時、第12回青龍展で《渡舟場》が入選
龍子「これが君と青龍社をつなぐ、渡し舟になってくれるといいね」
横山「青龍社に入選することが、アヴァンギャルドの一員になったような気がして嬉しかった」
- ・第28回青龍展に出品の《炎炎桜島》が青龍賞を受賞 (1956年)
1931年以来、二人目の快挙。「その精進、そしてその制作の意気旺盛」と龍子が高く評価した。
- ・1962年の青龍社脱退後も交流は続く
龍子「不肖の親にして、不肖の子ありだよ、横山はそれなりに生きて行くだろう」
横山「魂の師匠として、先生の声はいつまでも私の胸に生き続ける」

■龍子追悼の言葉から

○福田 豊四郎の場合

- ・龍子とともに十和田湖旅行にむかう
秋田出身の豊四郎を案内役とし、車で6日間にわたり十和田湖、田沢湖周辺を旅した。



「絶えずどこかで私たちを見ていて下さることを信じながらも、もともと芸術は各人個人の孤独な道であることを痛感する。」

○横山 操の場合

- ・死の直前に龍子宅を訪問
「描けない画家は死んだ方がいい」と絶食状態の龍子の気迫に圧倒される。



「『駆け上がるのだ！千尋の谷を駆け上るのだ！』という龍子の厳しい声が今も聞こえる」

【お知らせ】

- ・第6回記念館講座「恒子と縁（ゆかり）ある人々」（講師：大田区立熊谷恒子記念館 学芸員）は、3月12日（土）14：00～15：30（於：大田文化の森）にて開催。応募締切は3月2日（水）必着。
- ・龍子記念館名作展「筆線のモダニズム 龍子作品の先進性をめぐって」は4月10日（日）まで。次回展「草が実る 龍子の庭園植物記」は4月19日（火）から開催。